

# 谷口江里也による現代語訳『風姿花伝』 第13回

## 風姿花伝その二 物學のいろいろ

## 風姿花伝その二 物學のいろいろ

これは能の面白さが最もよく發揮される、この道一番の芸能である。演することが出来る物狂の種類が多くは多いほど、この道の達人と呼ばれるようになるにつれて、そのことが芸能全般の広がりや深みなど、あらゆることの向上につながるようになつていく。したがつて物狂は、くりかえしくくりかえし工夫をしながら、公案を重ねて嗜むようにしなければならない。何かの靈が乗り移った假令や憑物の数々、神や仏、生靈や死靈のたたりなどは、その憑物のありよう、なにがどうして取りついているかなどを学べば、それを手がかりにして容易に演ずることが出来るけれども、親と生き別れた者、失つた子供を探し求める者、夫に捨てられた女や、妻に先立たれた者などの、それぞれの想いがなせる狂乱の物學は、大変に大事であつて、よほど上手な為手であつても、それぞれの物狂の心をよく分らずに、どれも同じように、ただ単に狂つて見せたりなどすれば、やればやるほど、観る人の感心からは遠ざかつてしまふ。想いがその人を狂わせているわけだから、肝心なのはその想いであつて、何が大事といつて、何かを想うその氣色を何より大事にし、それが狂にいたるところを花にあて、心を入れて狂えば、観る人々の感所も、見所も、自ずと定まつてくる。そのような演り方で、もし人を泣かす場所を作りだす出来れば、それこそ無上の上手だとということを知る必要がある。このこと、心の底から、深く思ひ分らなければならぬ。

大体において、物狂いを演じる際の出立は、対象に似せるようにすることはもちろんだけども、しかし、場合によつては、物狂いを演じているのだといふことを上手く使い、ひときわ花やかに舞台に出で立ち、時の花を挿頭したりすると良い。

さらに言つておかなければならぬのが、物狂の場合は、物まねをするにあたつて心得ておかなければならぬことがある。物狂は、憑物の本意、すわなち狂うわけがあつて狂つてゐるのだが、たとえば女の物狂いなどをまねる場合に、戦闘の化身とも言うべき修羅や闘諍や鬼神などが憑いたように為すことは、何よりも悪いことである。憑物の本意を演じようとして、女の姿で怒りを表したりなどすれば見所が見当違いのものになつてしまふし、だからといって女であることを本意とすれば、憑物を演つてゐることにならない。また男の物狂で、女が憑いてゐるような場合も同じであつて、すなわち、あまり形にとらわれないのが秘事であるといつて良い。もしそうするように能の本に書いてあるとすれば、それはその本を書いた人の考へが浅いからであり、この道に長じた書き手であれば、そのように似合わないことを書くことはないと思われる。また、そのようなことを自分で考へ、公案を尽くすこともまた秘事であり、上手くなる秘訣であるといつて良い。

また面をつけない直面での物狂いは、能を極めた為手でなければ、十分に演じきれるわけがない。いうまでもなく、顔の表情、気色そのものがいかにもそれらしくなつていなければ物狂いに見えるわけもなく、上手くいかないからといってむやみに表情を変えたりなどすれば、それはそれで見られたものではない。これは申楽の奥儀ともいすべきことであつて、物まねが必要な、大事な申楽に初心者をあてたりするのは考へものである。能の一大事としての直面、もう一つの大事としての物狂い。この二つの大事な色を一つの心で織り成して、それでなおかつ面白いところに花をあてることが、どれほどの大事故か。それを思へば、よくよく稽古をするいがいはない。